

中部の

エネルギーを 築いた

人々

東大見発電所を建設し、岡崎電灯常務、
中部電力副社長・社長、
中央電力社長を勤めた **高石辨治**

高石辨治は技師として岡崎電灯に入社、東大見発電所の建設を手がけ、累進して常務取締役となった。また、東邦電力と協調関係のもと、中部電力(岡崎)を設立し、副社長・社長となり、その後中央水力電気、中央電力社長として活躍した。高石は、明治15年12月、愛媛県宇摩郡寒川村に、高石佐吉の長男として生まれた。県立西条中学、第三高等学校を経て、京都帝国大学理工科大学電気科に入り、青柳栄司教授の下で電気工学を修め、卒業にあたり避雷器に関するレポートを書いた。1年先輩には、豊橋電灯技師長(後に専務取締役)となった今西卓がいた。



高石辨治
(出典：『中央電力解散記念写真帳』
昭和17年3月)

東大見発電所の建設

明治42年9月、高石は岡崎電灯に入社した。岡崎電灯は、郡界川に岩津発電所を設け、明治30年7月から電灯供給を行っていた。その後需要も拡大し、第二発電所として東加茂郡賀茂村大字東大見に、神越川の流れを利用する東大見発電所(500kW)を建設することとなり、その建設担当として招かれたのである。ドイツシーメンス製の発電機を導入し、周波数は50ヘルツが採用された。発電所の建設を契機に、供給区域を西加茂郡、東加茂郡、碧海郡、幡豆郡、宝飯郡など西三河一帯へと広げた。その意味で岡崎電灯が広域的供給会社へと発展する礎となる発電所であった。

山間僻遠の地で、資機材を運ぶ道路もなく、地元の高い要望を受け、約1里に及ぶ道路の



東大見発電所現況(筆者撮影)

建設を行った。高石はほとんど1人で発電所の設計を行い、電気、土木の工事監督を取り仕切った。食事も野菜と乾物、それに自然薯が唯一のご馳走という生活だった。現場では、岡崎までの送電線(2万V、27.4km)を1回線にするか、2回線にするか、夜遅くまで議論が続いていた。

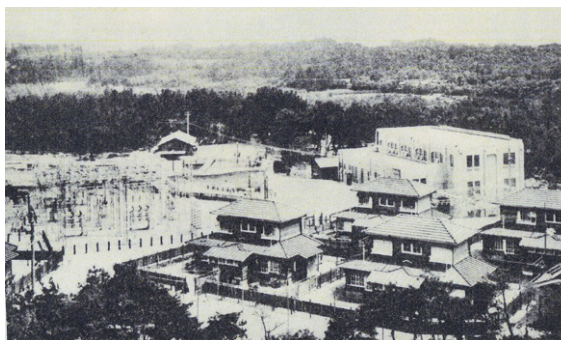
東邦電力との協調・岡崎中部電力の発足

東大見発電所に続き、高石は賀茂発電所(450kW)、足助発電所(2,000kW)等を次々に手がけ、大正8年12月に取締役に、3年後の同11年には常務取締役に昇進し、経営全般に関わるようになった。当時、岡崎電灯は、東邦電力、大同電力、矢作水力などに囲まれ、東京電灯の進出も懸念されており、隣接会社との関係が課題となっていた。東邦電力は関連会社として三河水力電気を傘下に置き、矢作川最下流の越戸地区に越戸発電所(7,500kW)の建設を進め、全量を東邦電力で買い取ることにしていたが、昭和4年4月、東邦電力宮川竹馬取締役と岡崎電灯の高石常務が中心になって、4,600kWを岡崎電灯に売り渡す需給契約をまとめた。高石は同年11月に三河水力電気の取締役(岡崎電灯社長杉浦銀蔵は監査役)に就任している。岡崎電灯はこれを機に、管内の周波数を60ヘルツに切り替えることを決め、昭和6年春に工事はほぼ終了した。その費用は28万円程だったが、10万円を東邦が負担することで懸案だった周波数統一問題が解決に向かった。

東邦電力との関係が緊密化するなか、さらに宮川・高石等が中心になって事業統合の話が進んだ。東邦電力の豊橋区域を割譲して岡



越戸発電所現況(筆者撮影)



三河水力電気越戸発電所
(出典『中京名鑑』昭和11年8月号)

崎電灯と合併して、昭和5年8月に中部電力が設立され、懸案の三河地域の電力統制が実現した。東邦側の信頼を得ていた高石は新設中部電力の副社長に就任、同9年10月には社長となった。中部電力は、その3年後の昭和12年8月、東邦電力に合併されている。

中央電力社長ほか

昭和12年12月、高石は天竜川の未開発電源の建設を目的に設立された中央水力電気(東邦電力系)の社長に就任し、さらに翌13

年8月には、同社と三河水力電気、南信電気が合して中央電力が設立されて、高石は社長に就任した。南信電気は大正9年4月に設立

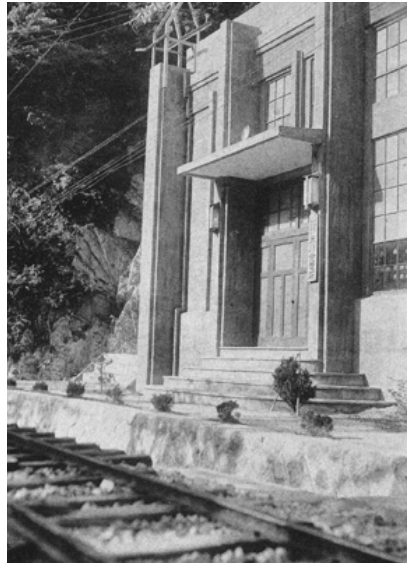


中央電力 生田発電所

(出典『中央電力解散記念写真帳』昭和17年3月)

された地元会社で、阿知川発電所(大正12年1月)を建設しており、一方三河水力電気(高石は取締役)は、昭和3年に東三河山間部に供給する東三電気を合併し、天竜川筋への進出を進めていた。中央電力は、豊川電気(昭和13年、社長：高石辨治)をはじめ、飯田線沿線の小規模会社6社を買収し、昭和15年2月に米川発電所(3,250kW)、同年12月に生田発電所(20,500kW)を建設したが、同17年4月中部配電に統合された。

高石は、このほか天竜電気(気多・豊岡発電所を建設、岡崎電灯に供給)、東濃電化、



中央電力 米川発電所

(出典『中央電力解散記念写真帳』昭和17年3月)

水窪川水力電気、燧洋電気などの取締役となりその経営に携わった。水窪川水力電気は、大学の先輩今西卓の依頼を受け、西渡発電所を岡崎電灯と共同開発し、発生電力の大半を岡崎電灯で受電した。高石は役員として参加し、昭和8年4月、今西の逝去した後は専務取締役に就任している(9年2月中部電力に合併)。また、燧洋電気は、愛媛県東端、銅

山川流域で水力発電を行った事業で、帝国電灯から譲受し、岡崎電灯の傍系会社となった。高石が愛媛県出身だったので、協力を求められたのであろう。

高石は、昭和4年3月から岡崎商工会議所常議員(昭和8年3月副会頭)に就任するなど地元の経済界でも活躍している。趣味は旅行と山登り、7人の子供に恵まれたが、昭和15年3月、59歳で没した。

(浅野 伸一)



西渡発電所(筆者撮影)